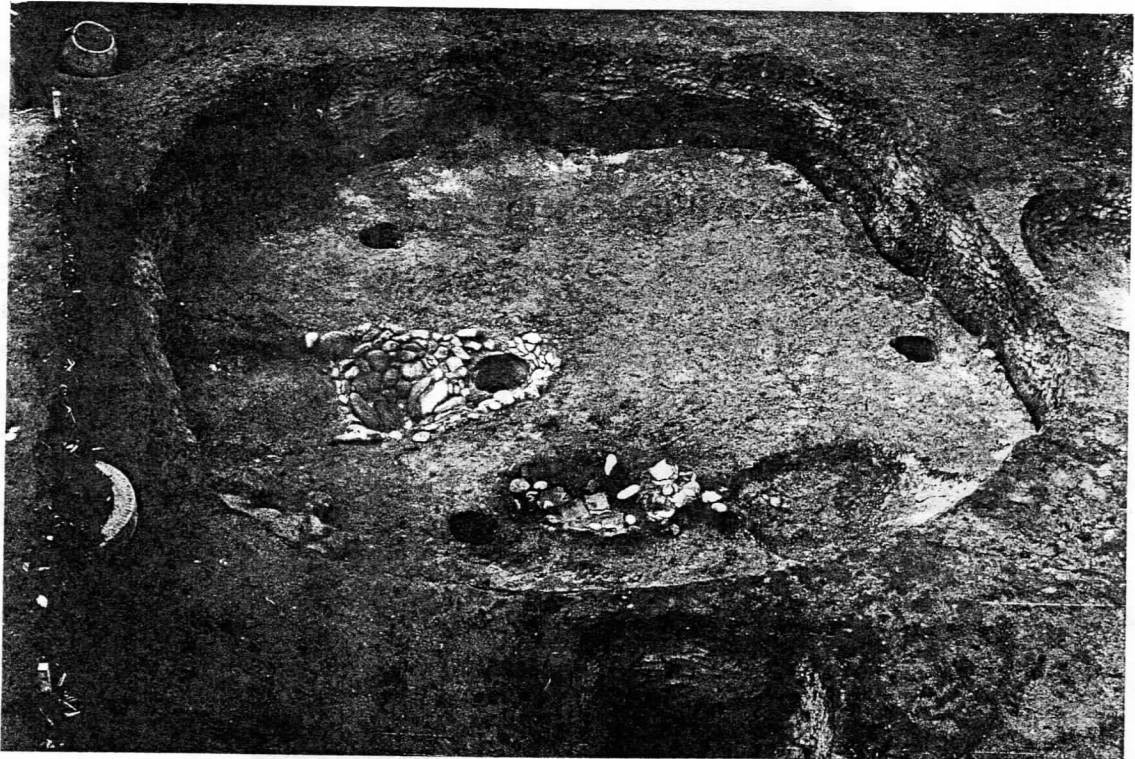


米沢市文化財年報 No. 1

米沢市教育委員会



花沢 A 遺跡の複式炉を伴う住居跡

遺跡詳細分布調査

米沢市教育委員会では、昭和60年度、市内に点在する遺跡の分布状況を示す「米沢市遺跡地図」を作成した。昭和60年度で383ヶ所、その後の調査で26ヶ所発見され、昭和63年3月現在409遺跡を数えている。

今年度から年次計画により、住宅開発が急速に進んでいる地区を対象に、遺跡の詳細分布調査を実施することとした。

初年度は米沢駅周辺の花沢 A 遺跡と南部に興譲館高校が建設された周辺の大檀 A 遺跡、大塚山遺

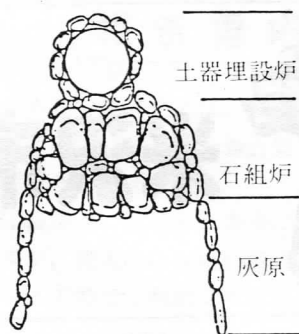
跡について詳細分布調査を実施した。

花沢 A 遺跡では縄文中期後葉期の複式炉を持つ竪穴式住居跡 2 棟が検出された。1号住居跡の複式炉は石組炉部分を土器片で構成する特異な形態を持ち注目された。又 2号住居跡は一辺 5 m の大形住居跡であり、壁の深さが床面まで約 90cm と、これまで確認された県内及び東北地方においても類例の少ないものと思われる。しかも住居の南東部の壁真下に約 60cm のテラス状の高まりが見られ、中央に 30cm のピットが存在することから、石棒な

などを立石した祭壇の可能性が強く、信仰に関するものとして関心が寄せられた。

大塚山遺跡からは長軸3.5mのほぼ内形プランの住居跡1棟と、土壇18基、馬蹄形土器埋設石組複式炉が完全な形で検出された。また、同様に大塚A遺跡からも同形態を示す複式炉を伴った住居跡2棟が検出されている。いずれも縄文中期後葉期と推定している。

調査期間：昭和62年10月1日～30日



馬蹄形土器埋設石組複式炉

覚範寺跡発掘調査〈第一次〉



覚範寺は戦国の英雄伊達政宗の父輝宗の菩提寺として天正14年（1586）建立されたもので、伊達政宗の師虎哉宗乙禅師を開山としたが、まもなく天正19年（1591）政宗の岩出山移封により覚範寺も移転した。

NHK大河ドラマ「独眼竜政宗」の放映により政宗のふるさと米沢がクローズアップされたことと、市史編纂の中世資料の一環として学術調査を実施した。

発掘調査に先立って、分布調査及び試掘調査を行ったところ、小字名に「覚範寺」「門前」などの地名もあり、地元で「虚空蔵講」をしていた東南斜面一帯が覚範寺跡らしい感触を得た。測量調査により、山腹の一部を切断したテラス状の平坦面と盛土して基壇を配した平坦面が確認されA～F地点の6ヶ所を検出した。又A地点とD・E地点の間を中心に25基の塚状遺構が確認されている。

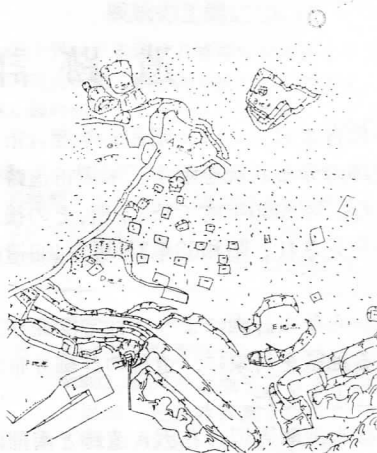
一次調査としては、建物を配されたと推測できるAとB地点を調査した。

A地点については、東西16m、南北20mで多角形状の基壇を持ち、北側と東側に溝が認められた。平坦面は明瞭に版築されており大形の建物が存したと推定されるが、礎石1個だけの確認で終わった。

B地点はA地点から北東へ約10m離れた場所で斜面をカッティングした1辺が約8mの正方形で北東部に約5m四方の平坦面が付随する。調査の結果、墓壇1基、小祠1基、墓道、階段、礎石建物跡が検出された。礎石は東西に二間、南北に一間に設置され、南北の両側に雨落ちの痕跡が検出されたことから切妻の屋根と推測される。

性山公治家記録に「……寺内（遠山覚範寺）ニ医国院、撐月庵、保福庵ヲ建テ、殉死三人ノ牌所トセラル……」とあり、この調査で確定できる要素は確認できなかったものの遺物や遺構から輝宗とその家臣たちの墓所（牌所）と推定している。二次以降の調査で全容を解明していきたい。

調査期間：昭和62年4月2日～30日



覚範寺廃寺跡推定地測量図

矢子大日向遺跡

「矢子大日向遺跡」は、昭和61年7月に発見された遺跡で、米沢の西郊・広幡町字大日向山に分布し、鬼面川を挟んだ西山の舌状台地先端部にある。

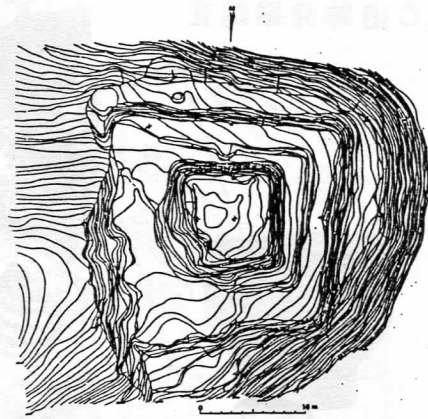
この遺跡を含む一帯は(財)山形県農地管理公社の所有になるもので、ここに「大日向地区団体営農地開発事業」として、一大リング園団地を造成するため、米沢市農業協同組合が施行して2年目となる。

この遺跡は造成初年に発見され調査を実施したA地区、B地区の他に新たに石器の分布している地区も発見され、しかも今回の調査区は塚と縄文時代の住居跡も発見されたことから、それぞれC地区、D地区とし、4地区を一括して矢子大日向遺跡とした。

今回発掘調査を実施した矢子大日向塚は、三段構築を有する方形塚であり、形態的には関東地方から中部地方にかけて全域的に分布する三段塚に類似するものであるが、塚の西側面に段を示さない特徴を有する。塚の上段で一辺が約11m、二段目が約13.5m、三段目が約22mと全国的にも最大級の大きさである。塚内部からの遺物は検出されなかった。

三段塚に関しては出羽三山信仰に係わる修法壇という考え方が定説化しているが、矢子大日向塚は主軸長が南北を示すことから方位を意図的に配したと考えられる。ことに南方は羽山神社を指すことから羽山信仰、さらには吾妻信仰に深い関係を有するものと考えられる。

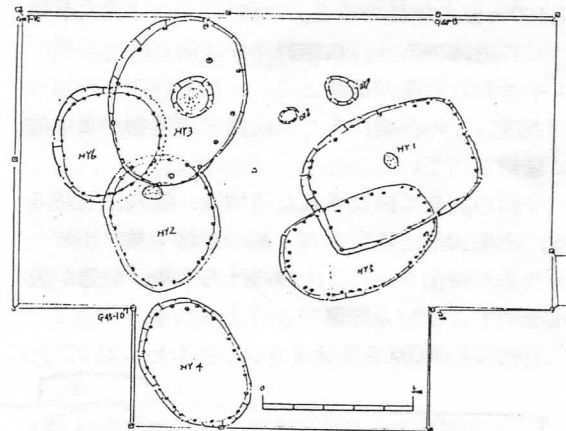
また、塚の最下層から石器が検出されたことにより、塚以外にも縄文時代の集落の存在が可能となり範囲確認のため試掘調査を行った。



矢子大日向塚平面図

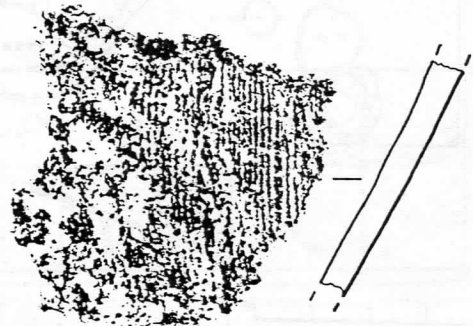
その結果、竪穴住居跡6棟、土壇2基が検出された。竪穴住居跡は縄文早期5棟、同前期1棟があり、特にHY Iは撚糸文の住居跡で、撚糸文文化の北限といえよう。他の4棟も縄文早期中葉の田戸上・下層、明神裏Ⅲ式の土器が検出され、資料の少ない時期だけに、新たな資料を加える貴重な発見となった。

調査期間：昭和62年5月18日～7月18日



矢子大日向遺跡拡張区遺構配置図

87. 07. 10作成



撚糸文(よりいともん)拓本

箕籬C遺跡発掘調査

ザル



本遺跡の西側に運動広場が造成されるという情報により、市教委では開発者の世紀工業(株)と事前協議を行い、試掘調査、ボーリング探査により遺跡の中心部1,600㎡を調査区と設定した。他の箇所は工事を進めるという同時進行で行った。

この遺跡は、梓川左岸を利用した東西300m、南北100m位の細長い遺跡で、東側約半分は縄文前期初頭の遺跡であり、西側約半分は同じ縄文前期でも中葉から末葉の遺跡と考えられている。今回の調査区はこの西側にあたり前期末の遺物が集中的に発見されている。

今回の調査で確認された遺構は、竪穴住居跡8棟、土壇10基、風倒木壇4基、炉跡1基、小ピット28基が検出された。土壇のうち3基は形態が袋状を示すことから貯蔵穴と考えられる。

遺物は約300点を数えるが、大半はチップ、フレ

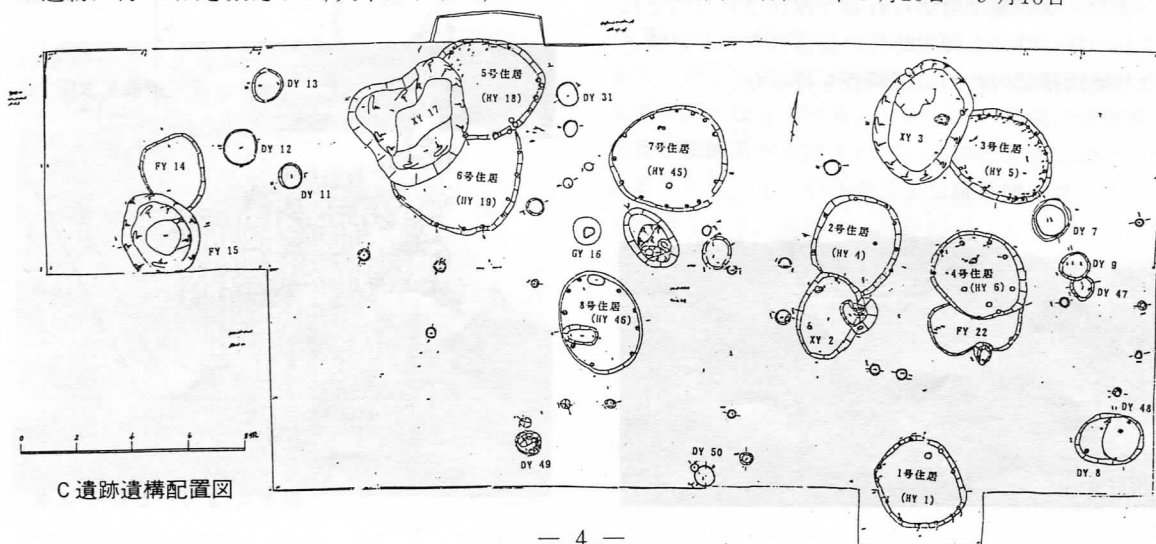
ーク等による剥片である。なお5号住居跡床面から小形の完形土器1点と2号・3号住居跡から石鏃、石皿が発見されている。

この調査は梓川上流域の遺跡の性格を確認する上で大変重要な意味を持つこととなる。当時の河岸段丘の発達、自然環境の推移は少なくともこの遺跡の確認によって、縄文前期頃には安定した地形状況を呈していると思われる。

特に縄文前期の集落については最近、遊佐町の吹浦遺跡や高島町の押出遺跡などで調査されており、米沢でも昭和58年に大清水遺跡の6棟が発見され、同様に今回8棟検出されるに至った。

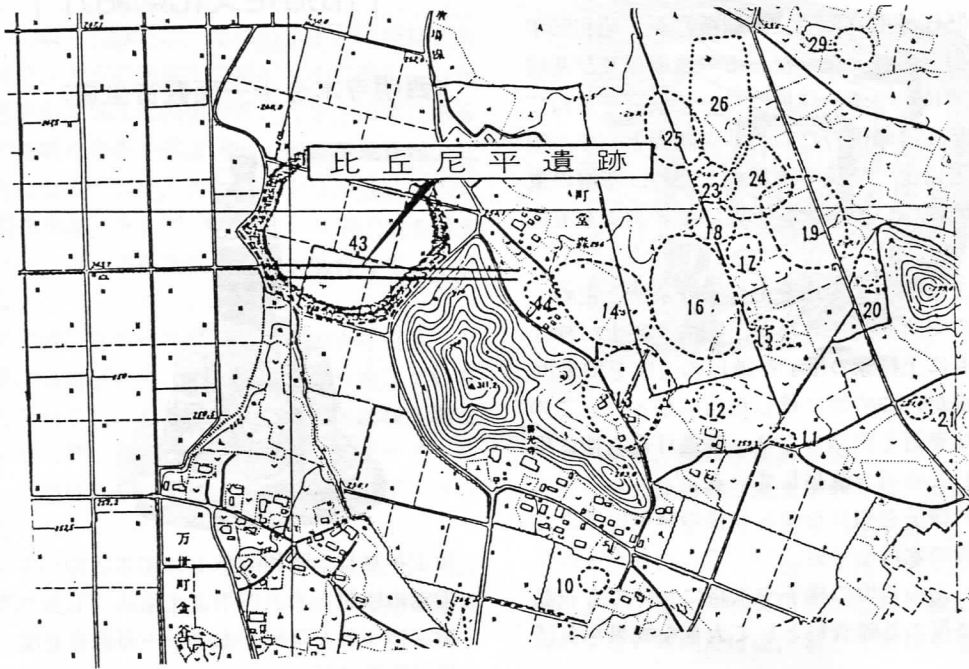
それぞれの遺跡に特徴があるが、同時期に居住していたことは事実であり、今後縄文前期の社会文化を解明する好資料といえる。

調査期間：昭和62年8月20日～9月16日



比丘尼平遺跡発掘調査

ひく にだいら



この遺跡は、万世堂森山の西に位置し、梓川の扇状地の末端部を羽黒川が浸蝕して段丘を形成している。遺跡の面積は1万㎡と推定され、八幡原遺跡群の中では最大規模の面積を有する。

昭和53年10月に米沢駅東線の下水道管理設工事に伴う緊急発掘調査が最初の調査である。この時方形周溝墓2基が発見され、当時としては県内最初の発見であり関係者の注目を集めた。

昭和54年4月に水田用水路取付工事に伴う緊急調査で方形周溝墓1基が確認され、比丘尼平遺跡の重要度が増した。

今回の調査は、全長240m、幅員30mの米沢駅東線の造成に伴う調査で、前2回の調査を除く全面調査となった。調査の結果、検出された遺構は堀

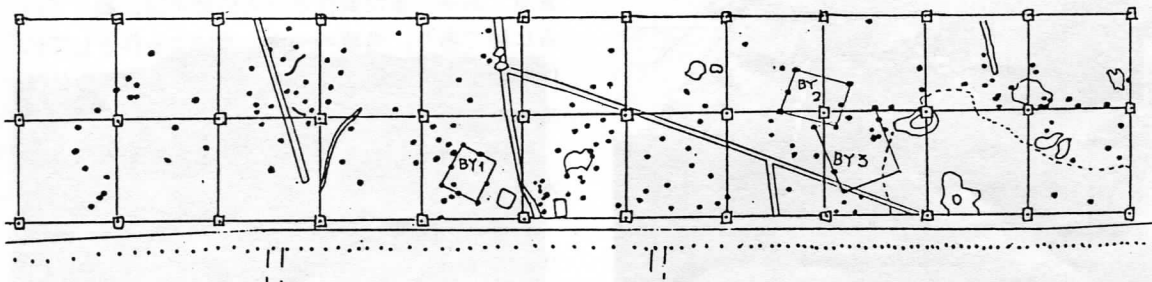
立建物跡3棟、柱穴183個、風倒木塚3基で、遺物は、石器、土器片、陶器片など28点である。

堀立建物跡については間尺等から推定するに奈良・平安時代のもものと確認される。柱穴については大半が縄文期及び古墳時代に係るものと推定されるが、土地改良の際に大方削平されてしまったものと考えられる。

今回の調査で判明したことは、遺構が西側に集中しており東側には延びないことであった。

又遺物の縄文式土器片、土師式土器片、須恵器片、陶器片から見てもその時期に居住していたことが推定できる。

調査期間：昭和62年8月3日～9月30日



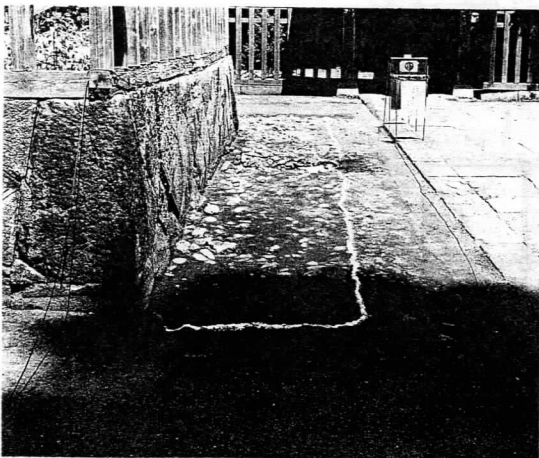
グリッド配図

国指定史跡上杉家墓所修復基礎調査

米沢藩歴代藩主の墓所（御廟所）が、昭和59年1月に国指定史跡となった。その後廟屋及び基壇の老朽が激しいので、修復について検討を重ねてきた。今年度は修復のための基礎調査として、空堀の現状と過去の経緯を確認するため、基壇の東側及び西側についてトレンチ掘による調査を実施した。

初代藩主没後、この地を上杉家の墓所と定め、歴代藩主の廟所としてきたが、明治9年上杉神社建立とともに上杉家の祖上杉謙信の遺骸を旧米沢城址の御堂からこの地に移し正面に祭った。このことにより参道を改修したり、寄進灯籠を他に用立てたりして墓所を改築している。

これらの様子を知りながら今後の修復に役立てようと墓所の水路や参道についての調査を進めた。その結果、元の基壇の様子や水路についても一部判明し、修復の基礎資料として大きな成果をあげている。



市指定文化財紹介

〈西明寺木造十一面観音坐像〉



指定年月日：昭和63年1月26日

指定の種類：米沢市指定文化財（工芸の部）

指定物件名：西明寺木造十一面観音坐像

指定物件の所在：米沢市遠山町1,562番地

指定の範囲：本尊のみ

（光背及び蓮台は後補のため除く。）

指定理由：「西明寺木造十一面観音坐像」は、作風や造像技法から見て室町時代に属し、首柄部の記銘から製作年代は天正16年（1588）と確認された。仏師については明確に判読できないが、七条大仏師法印康□（花押）、同大式と記銘されている。

全体的に造形が粗野である。これは室町時代の特に応仁の乱（1467～77）後の世相混乱の体を示しており、一般的にレベル低下の感は否めない。また、頭上仏面が二面欠落と、一面が風化が激しく不明面となっている。しかし、この像の製作年代及び仏師名が記銘されているのは非常に珍しく貴重である。また製作者は大仏師系図に載っている仏師であり、当時の一流仏師による作として仏像彫刻史上の規範となるものと思われ貴重な仏像である。

材質・構造：木造、金泥、玉眼、白毫水晶、寄木造り。

法量等：像高—87.8cm、肩はり—31.2cm、膝はり—55.6cm。

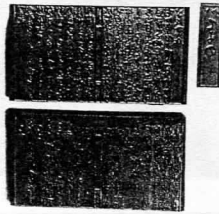
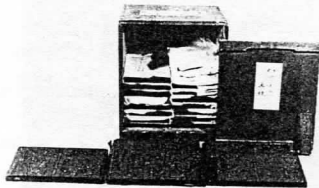
製作年代：天正16年9月吉日

〈かてものの「版木」〉

指定年月日：昭和63年1月26日
指定の種類：米沢市指定文化財（歴史資料）
指定物件名：「版木」かてもの
指定物件の所在：米沢市立上杉博物館
指定の範囲：材質 やまざくら
法量 縦14cm、横26.5cm
題簽ともに28枚
製作年代 享和2年（1802）

指定理由：「かてもの」は天明3年（1783）の大飢饉に際し、上杉鷹山の意をうけた重臣・荻戸善政によって寛政12年（1800）に側医矢尾板榮雪等に諮り飢饉救済の資として、享和2年（1802）に当時の領民に刊行頒布したものである。刊行冊数1,575冊。

その内容は、飢饉に備え米穀の貯蓄と共に、それを食いのばさせる目的の救荒食物を約80種（草

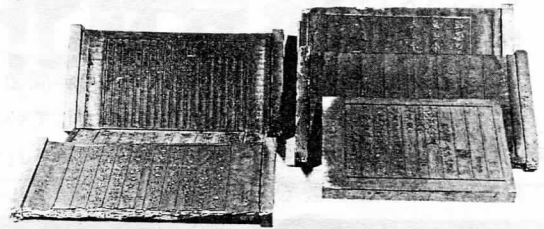


木果実）を選び、その調理方法を具体的に述べさらに、味噌の製法や凶作に備え蒔いておくもの魚鳥獣肉の心掛けまで懇切に教えている。これは実際天保4年（1833）の飢饉に大いに役立った。

現在、荻戸善政の原稿も丸山蔚明が清書した原本も残っていないが、米沢市立上杉博物館所蔵の版木は1枚の欠損もなく、たび重なる飢饉に対する藩政を窺う貴重な歴史資料といえる。

「かてもの」に類した書物は他にも編集されたが、確かな成果を挙げた点で高く評価でき、200年後、飽食時代といわれる今日、食物学、栄養学、薬学、植物学と各方面からも研究資料として注目されており、本市として誇れる資料である。

〈嚶鳴館遺稿の「版木」〉



指定年月日：昭和63年1月26日
指定の種類：米沢市指定文化財（歴史資料）
指定物件名：「版木」嚶鳴館遺稿
指定物件の所在：米沢市立上杉博物館
指定の範囲：材質 やまざくら

法量 縦25.2cm、横44cm
叙 — 3枚 巻の6—17枚
序 — 3枚 巻の7—18枚
目録—1枚 巻の8—17枚
巻の1—18枚 巻の9—18枚
巻の2—14枚 巻の10—12枚
巻の3—16枚 跋 — 1枚
巻の4—13枚 附録—8枚
巻の5—9枚 題簽—1枚
計 169枚（327面）

製作年代 嚶鳴館遺稿 叙
文化4年（1807）
藤治憲 撰

指定の理由：「嚶鳴館遺稿」は上杉鷹山の師細井平洲の漢文体遺稿集であり、文化4年（1807）平洲の七回忌にあたり、鷹山が神保行簡等に校定刊行を命じたもので、詩集、序、記、紀行、行状、伝、説、銘、題跋、碑銘、書牘等全十巻から成る。文化5年（1808）に刊行され、版木は平洲の養嗣子徳昌に下付され嚶鳴館に蔵せしめられたが、その後の変遷を経て大正15年米沢市所有となった。

169枚の版木がすべて整い上杉鷹山の先師を追慕する深い情を伝えた好資料である。

鷹山をはじめ米沢を導いた細井平洲の精神と人となり、鷹山や平洲とかかわった人々の生涯を知る重要な資料である。

遺跡地図の発刊

米沢市は歴史のまちとして知られ、特に昭和62年はNHK大河ドラマ「独眼竜政宗」の放映で、政宗生誕の地として再発見されました。

又上杉の城下町として江戸時代約270年間領され、市民生活や文化に大きな影響を及ぼしている。

明治、大正時代にも先人の古墳等が発見されていましたが、極少数でした。戦後、考古学グループによる発掘調査など数ヶ所ありましたが、本市における埋蔵文化財の本格的な調査は昭和49年度八幡原工業団地の造成に伴う緊急発掘調査から始まったと言っても過言ではありません。

その後十年間に亘り発見した遺跡について、昭和60年度現在で383ヶ所を表示した「遺跡地名表」及び「遺跡地図」を発刊し周知を図りました。

しかしこれらの地名表及び地図については、あくまでも、表面採集や地元の方々からの聴き取りによるところが多く、遺跡の性格や範囲については不明瞭な点もあり、開発計画等があれば、その遺跡について試掘調査を実施し、範囲性格を確定する場合もあるのでご承知おき願います。

この遺跡地図を完成するまでには、いろいろ研究を重ねましたが、遺跡の分布状況を把握するためには主要河川流域を中心にまとめるのが最良ということで、それぞれ、梓川、刈安川、前川、羽黒川、松川、大樽川、綱木川、太田川、小樽川、最上川流域群としました。

昭和62年10月、開発関係者に追加配布するためその後発見された遺跡26ヶ所を含めた409遺跡について再版した。遺跡の周知のため無料にて頒布しておりますので、ご入用の方はご一報下さい。

〈今年度出土の貴重な遺物〉

花沢A遺跡の住居跡付近から写真に示す様な完形土器が出土した。口径24cm、器高52.6cmの深鉢形土器は縦長に展開する「U」字、「E」字状文様を施し、当地方では類の少ない資料である。



報告書紹介

米沢市教育委員会では、埋蔵文化財及び一般文化財を年次毎に調査し、報告書を作成しておりますので紹介します。

関係機関等に配布をし参考にしていただいておりますが、個人的に入用の場合は原価にて頒布しておりますのでご利用ください。

〈埋蔵文化財調査報告書〉

- 『水窪関係報告書』 第1集 在庫なし
- 『八幡原遺跡調査報告書Ⅰ』 第2集 在庫なし
- 『八幡原遺跡調査報告書Ⅱ』 第3集 ￥4200
- 『八幡原遺跡調査報告書Ⅲ』 第4集 ￥4800
- 『比丘尼平遺跡調査報告書』概報 第5集 在庫なし
- 『桑山遺跡発掘調査報告書Ⅰ』 第6集 ￥4000
(水神前・柿の木・ニタ俣B各遺跡)
- 『笹原遺跡発掘調査報告書』 第7集 ￥3500
- 『桑山遺跡発掘調査報告書Ⅱ』 第8集 ￥4950
(八幡堂・ニタ俣A各遺跡)
- 『戸塚山第137号墳発掘調査報告書』 第9集 ￥2000
- 『戸塚山古墳群詳細分布調査報告書』 第10集 在庫なし
- 『左沢遺跡発掘調査報告書』 第11集 ￥1500
- 『法将寺遺跡発掘調査報告書』 第12集 ￥1040
- 『白旗遺跡発掘調査報告書』 第13集 ￥500
- 『上浅川遺跡発掘調査報告書 第1・2次』 第14集 ￥1660
- 『上浅川遺跡発掘調査報告書 第3次』 第15集 ￥6000
- 『石垣町遺跡発掘調査報告書』 第16集 ￥800
- 『桑山遺跡発掘調査報告書Ⅲ』 第17集 ￥3700
(大清水遺跡)
- 『大浦A・C遺跡発掘調査報告書』 第18集 ￥1900
- 『三の丸・生蓮寺遺跡発掘調査報告書』 第19集 ￥1170
- 『木和田館跡第1次発掘調査報告書』 第20集 ￥400

〈一般文化財調査報告書〉

※ 米沢の民家 第1集 ￥990

表紙の土偶について

この土偶は、米沢市八幡原No.30遺跡より出土したもので、縄文後期(約3800年前)のもので、顔と腕の部分がこわれていますが、ふくよかなオッパイやおなかは女性をあらわしています。

県内には縄文時代の土偶がたくさん出土していますがこの時期のは少なく、縄文期後を代表するものといつてよいでしょう。

昭和56年12月17日米沢市指定文化財となる。

発行 米沢市教育委員会
〒992 米沢市金池三丁目1-14
(担当 社会教育課文化係)
TEL 0238-21-6111